

ダイアログを用いた音楽科授業デザインの再考

渡辺 行野*

2016年、中央教育審議会では、新学習指導要領に向けて資質能力の育成と主体的・対話的で深い学びについて提唱している。本研究では、アクティブラーニングにおける三つの視点から、学習過程の質的改善をもとに、D.ボームの「ダイアログ」を手掛かりにして、自らの授業デザインを用いた実践について考察を深めた。

実践においては、ダイアログを用いて、他者との意見を比較・関連させ、自分自身の解釈や考えを表現する「場」や仲間と共有する時間から、互いを認め合う「関わり」空間を設定し、共同体がコミュニケーションやダイアログを通して深化していく学びを検証した。授業デザインにおける場面ごとのプロセスでは、それぞれの場面において有益な学習効果が見られたが、個々の学習の深化に対しては課題も見えてきた。

Key Words : ダイアログ, 対話, コミュニケーション, 授業デザイン, 音楽科教育

はじめに

中央教育審議会(以下、中教審)における新学習指導要領改訂では、多くの議論が挙げられている。その中から幾つか引用すれば、①主体的に学びに向かい、必要な情報を主体的に判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること、②対話や議論によって、自分の考えを根拠をもって伝えとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること、③変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新

たな問題の発見・解決に繋げていくことができること、などがある。これらの必要な力を備え、自分自身の力として発揮できるようになり、更には自分らしく人生を実現できる本来の「生きる力」とはどのようなことから育まれていくのか、また、学習者たちの「資質・能力」と同時に指導者の「資質・能力」の向上にむけて、今問われている教育、ひいては授業の中でできることとは何かを考え、授業デザインの再構築を図り、効果的な実践を深めていくことが求められる。本研究では、ダイアログを用いた授業実践を考察していき、ダイアログの有効性について研究していくことを目的とする。

I 「対話」の構築に向けて

中教審では、社会と自分との関わりを持ち、自

*人間学部児童発達学科

身の在り方を学習と繋げて、生涯にわたり能動的に学びと関わっていくための資質・能力を学習者たちが「どのように学ぶのか」として、「主体的・対話的な深い学び」の実現に向けても提案しているが、継続的な学びが必要とされている現在、縦のつながりの見通しを持って系統的に考えていくことが必要とされている。保・幼・小・中・高・大までの環境の中で、多様な人々と知り合い、多くの考えを知り、多くの他者と関わることで考えを広げられる「対話」が大事である。また、大学での教員養成にも、各教科等で学んできたことを連続的、系統的に積み上げていく必要性も当然ある。つまり、形式的にのみ対話型を取り入れた授業や特定された指導の型の構築を目指したのではなく、学習者それぞれの興味や関心を基にして、「対話」を重視しながらコミュニケーションを図ることが大切である。そして、対話を構築することが、学習者一人一人の個性や感性、創造性などの学びから得られるであろう多くの可能性に応じた、多様で質の高い学びを引き出すことを意図するのである。

松下(2016)は、「アクティブラーニングは、多くの認識として、それまでの一方的な知識伝達型講義での聴くという学習を受動的学習と見なし、そうではないという意味での能動的な特徴をもって、学習パラダイムを支える学習として提唱されている。しかし、一方的な知識伝達型講義を聴くという学習を乗り越えるだけでは、まだ何が能動的な学習なのかを示していることにはならない。」と提言している。ただ表面的に活動しているようにするのではなく、思考の関与、知を肯定的な感情と結び付けて自らを構築していこうとする一人一人の学びの深さが問われると考える。つまり、その連続性からなる学びの構築に必要なっていく学習をアクティブラーニングと捉えることができるのではないだろうか。更に、松下(2016)は、「『深い学習』、『深い理解』、『深い関与』、という、互いに異なるが関連しあう『深さ』の系譜をふまえ、アクティブラーニングにおける能動性を、＜内的活動における能動性＞と＜外的活動における能動性＞に概念的に区別し、内的活動における能動性をなおざりにしないこと。また、『深い関与』

とは、内的活動の深まりを表す言葉であるとし、動機付けとアクティブラーニングの重なり合う空間で関与は生成される」と提言している。これは、内的活動、外的活動における学習者の関与による繰り返し学習、連続性の経験から学びが深化していくことである。学習者による、この「深い関与」を目指した能動的な学習活動が、対話を深め、対話を構築していくことに繋がるのである。

II 学習環境の設定

主体的に学習者が対話を始めるには、学習環境を整えることが大事である。一斉・小集団・グループワーク・個人といった様々な学びのかたちを目的に応じて選択し、その方法や手段をそれぞれの学びのデザインと共に使い分けことが重要であると考えられる。知識や情報を伝える、または指示を出すなどのかたちの場合には、効率的に活動を進めるためにも一斉指導で行い、個々の考えや感じた事を記録するなどの場合は、一人一人が個別に学習に向き合う必要がある。また、自分自身の考えや感じたことをグループ活動の中で交流することで学びに広がり生まれる。そのようなグループ活動を行う前には、ある程度の話し合いのシステムや一人一人の役割、また学習の目的や達成目標などの適切な設定も必要である。また、学習の進度に伴いながらグループの入れ替えや交流後に共有する場面設定を行うことで一人一人の思考を発展していくことが求められる。

グループ活動で学習者たちを主体的に動かし、協働的な学びを育むアクティブラーニングを促すためには、一人一人が学ぶための十分な情報や知識が必要である。学びを育むグループ活動や主体的な活動というのは、すぐにできるものではなく、指導者の仕掛けや設定の工夫があってこそ生まれる活動である。いつも同じかたちの活動を行うのではなく、色々な場面ごとに有効な活動を取り入れ、能動的・受動的な学びをうまく使い分け、学習者の主体的な学びを引き出しながら、「教える」のみではなく、学習者たちが「学ぶ」という能動的行為を通して学習内容の定着を図っていくようにしていく。そして、その活動の中から、気づ

きや個々の発想を進展していくために、学びのベースとなる基礎知識の習得や情報収集などを効率的に行った上で、グループ活動の技法を取り入れることが大事である。

学習環境が構築されていない学習集団では、アクティブラーニングをしても当然教育効果は低くなる。学習者の協働的な学びを育み、学習目標の達成に結び付けていくためには、自分の考えや感じたことなどの意見を発信できる空間が必要であり、どんな意見に対しても、集団が許容してくれる雰囲気等ができていないとグループ活動は活性化していかない。対話には、そのような信頼関係のある居心地の良い空間、環境づくりを構築する必要がある。協働学習を進める際には、学習者の言動を丁寧に傾聴する姿勢やコミュニケーションを大切にするなど、学習者にとっての安心と信頼が求められる。本時の学びにおける「プロセス」の確認から、見通しを持った学習を取り組ませるためにも、目的・そのプロセス・方法・ゴールを学習者に明確に示す。そしてグループ活動を円滑に行うために、アクティブラーニング実践の体験型を意識した、能動的学習、授業プラン、授業の視点、全体を通しての振り返り・気づき、発問のスキル向上、ワークシート、授業ルール等々を十分に検討し、対話を通して一人一人の学びが共有されていくことで深い思考を構築することを目指すことが必要である。

Ⅲ 授業デザイン

1 デザインの構造として

授業デザインにおける構築プロセスの要素として、①空間や場面の設定、目的を共有する。②意識の持ち方、方策を考える。③あらゆる情報を準備しておく必要性。という3点が大切だと考える。中教審でも話題になっている「学習の内容と方法の両方を重視し、学習者たちの学びの過程を質的に高めていくこと」からも分かるように、学びを構築し、学びの連続性を確保することが求められる。そのため、今、学習者たちにとって求められる育成目標、目指す資質や能力として「何ができるようになるか」を指導者が捉え、その上で身に

付けさせたい学ぶ意義「何を学ぶか」を明確にし、指導方法の見直し、計画と実施から生まれる指導方法「どのように学ぶか」、一人一人に応じた支援の仕方「どのように支援するか」を考えていく必要があるとされている。そして、指導方法の結果としての評価として「何が身に付いたか」に繋がるわけであるが、それらの構造の質を向上させるために、「実施するために何が必要なのか」を再検討していくという結論になる。これらは、幼・小・中・高・大までの発達段階を考慮した上で共通して意識し、どのように学ぶかの切り口として考えていくこととする。以下、中教審の考えを採用し授業レベルに咀嚼し、図式化した。

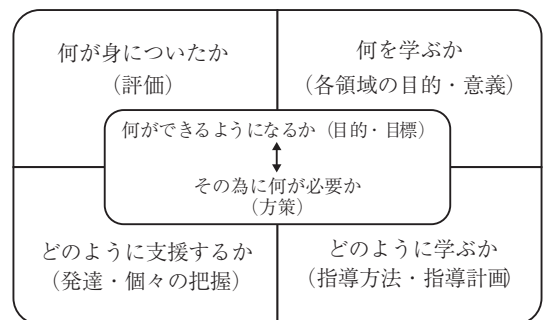


図1 学びのサイクル

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的・アクティブに学び続けるようにすることであり、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」にみられるように、多様な表現を通じて、よりよく対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められている。

学習における問を見いだして解決したり、自己の考えを形成し表現したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかが重要なのである。

2 ダイアローグ

活動の中では、学習者の学習へのダイアローグ、学習者同士のダイアローグ、自分自身へのダイアローグなどが必要であり、ダイアローグの質や意

義も問われる。

デヴィッド・ボーム(Bohm,D., 2012)は、「ダイアログとは多角的なプロセスであり、会話形式の専門用語や交流といった典型的な概念だけを指すのではない。ダイアログは、人間的な経験という、並外れていて広い範囲を探すプロセスなのだ。つまり、それは人が確固として持っている価値観であり、情動の本質や強さなのである。また、思考プロセスのパターンであり、記憶という機能であり、受け継がれてきた文化的な神話を意味するものである。本質的に、有限な媒体が集団的なレベルで生まれ、持続していく方法をダイアログが探る。探るためには文化や意義、自己認識と見なされている強力な想定に投げかける必要がある。」と提言している。つまり、対話は最も深い意味において、人間とは何か、という従来の定義が適切かどうかについての判断を促し、より人間的であることの可能性を集団で探るように促していると言える。また、「コミュニケーション(communication)とは、『伝える』という言葉の意味の一つとして、何かを共通のものにする。すなわち、ある人から別の人へ、できるだけ正確に情報や知識を告げるという意味であるが、これだけでは言葉の表す意味の全てが網羅されない。『ダイアログ(dialogue)』とは、言葉の意味を通して、何人の間でも可能なものであり、対話の精神が存在すれば、一人でも自分自身と対話できる。それは、人々の間を流れている『意味の流れ』というイメージであり、グループ全体に一種の意味の流れが生じ、そこから何か新しい理解が現れてくる可能性を伝えている」(Bohm,2012)。何かの「意味」を共有することは、互いに繋がっていく役割を生む。実際の対話の場面では、話し手と聞き手双方の意味は、ただ似ているだけで、同一のものではない。自分のすでに知っているアイデアや情報を共有しようとせず、「客観的事実」と「意味づけ」を持ちつつ、相互理解を深めていくコミュニケーションの形態を目指すことによって、自分の意見と相手の意見の関連する共通の新しい内容が生まれ、新たなものを協力して創造していくことが可能になっていくのである。このような、コミュニケーションに入り込んだ「類

似点と相違点」では、人々が偏見を持たず、互いに影響を与えようとせず、相手の話に自由に耳を傾けられることが大事である。また、話し手は一貫性の関心を持ちつづけること、今まで考えてきたものや意図とは別の異なったものを取り入れる準備をすることによって、互いのコミュニケーションが深まってくる。人々が、協力し合おうとするならば、何かをともに創造できなければならず、互いに話し、行動する中で、具体化されたものを生み出す。自分の考えを持ちつつ、ダイアログにおける「聞くこと」、グループのメンバーの言葉や意図に徹底して、注意深く共感的な態度で接し、自分の考え方に固執したり、それを擁護したりしすぎない創造的な活動において、自由にコミュニケーションすることが大切なのである。個人と集団を意識した関わり合い方と、そこに生まれるプロセスが大事になってくる。これらの関係性を構築した上でダイアログが成り立ち、ダイアログから議論へと繋がっていくプロセスである。これらの構造は授業構成においても、同じことが考えられる。

今回の音楽授業デザインでは、学習における思考過程の可視化を意識的に多くの場面で取り入れる。それは、無意識に行われていた学びの暗黙知を具体的に可視化していき、それらを他者とともに客観的に評価していくことにより、グループによる問題解決にも繋げていくことである。音楽を聴取しダイアログを続ける中で、学習者の独自のアイデアが活発に表出し自己表現に繋がっていく。互いを認め合いながら、相互作用を生み出す時間となることを目的としている。

3 音楽科授業デザイン

多文化共生時代では、積極的に自己を確立し、他者を受容し、様々な価値観を持つ人々と共に「思考」していくことが求められる。また、協力・協働(協同、共働)しながら課題を解決し、新たな価値を生み出しながら、社会に貢献できる力を養うためには、学校・大学というコミュニティの中で、多様な価値観や体験を持つ集団と相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成していくことが必要である。

筆者は、授業デザインとしてダイアログを取り上げた研究を行ってきたが、今回の研究では、ダイアログの研究結果を援用しながら深めていくこととする。以下は、これまでの研究から見えてきた結論である。

ダイアログを用いた学習活動では、情報を共有し合い、自らの力で深く考え、相互に考えを伝え合い、深め合いながら合意形成・課題解決していくことが必要だと考える。しかし、学習段階で、他者と協調しながら高め合いの学びを展開していくには、一人一人が一定の基礎知識を持っていることが求められる。他者と関わる活動の前には、基礎的な学習を日頃より身につけさせておくことは言うまでもない。一人一人の考えや意見は、意識的に持たせておくことが重要である。そして、学習過程において、コミュニケーションやディスカッション、ダイアログを用いた実践を行っていくが、それらが活性化されるためには、一人一人のグループへの貢献が大事になる。また、「ダイアログ」は、グループでの活動となるため、個々の価値観とのバランスを図る力が不可欠であり、リーダーシップを発揮し、他者との関わりを導く力も同時に働かせる必要がある。学習における目的を共有し、一人では達成できないものを、「ダイアログ」を通してグループで創造していく。学習過程の中で楽しみを感じながら問題解決に至ることを目指していくのである。他者と協力し合うとは、何かをともに創造できなければならない、互いに話をしながら行動する中で、具体化されたものを生み出すことなのである(渡辺, 2015)。と結論づけている。

このことから、授業におけるダイアログ・議論に向けて、会話が成り立つ関係性や空間を早い段階からあらかじめつくっておく必要があり、学習者たちが自由にダイアログやコミュニケーションのできる空間、教材の意味や目的、指導者の役割、活動における工夫等各々の関係性が発揮し合い、補完し合う授業構造を成り立たせることが望ましい。

IV 授業実践におけるダイアログの活用

授業実践においては、対象を教員養成系の大学生とした。今までの研究成果の知見から作成した授業デザインマップを援用し、実践を試みた。学生の発達段階を考慮した授業内容や発問を用いたが、デザインマップのコンセプトは発達段階によって変わるものではなく、共通して活用できるものである。講座名は、「音楽科教育法演習」であり、学部4年生への取り組みを一部分紹介することとする。

まず、授業における活動では、個と集団を意識した関わり合いと、そこに生まれる学習知と経験知との融合が大事になってくるので、「ダイアログ」を用いた活動を行う際に、指導者は授業におけるダイアログや議論に向けて、会話が成り立つ関係性や学習空間を準備しておく。学習者がダイアログやコミュニケーションのとりやすい空間を生み出すため、座席も意図してさまざまに入れ替え、今回の教材の意味や目的をあらかじめ伝達し把握させておく。ここでは、指導者と学習者、学習者同士、学習者による学習への「ダイアログ」がそれぞれあり、ダイアログが学習を補完し授業構造を成り立たせるために重要な役割を担うことになる。筆者の作成した音楽科の学習プロセスを用いて、様々な学習領域において繰り返し実践を重ねていく。もともとの学習経験知を基にして、幅広く学習者たちの学びが構築されていくことをねらいとしている。

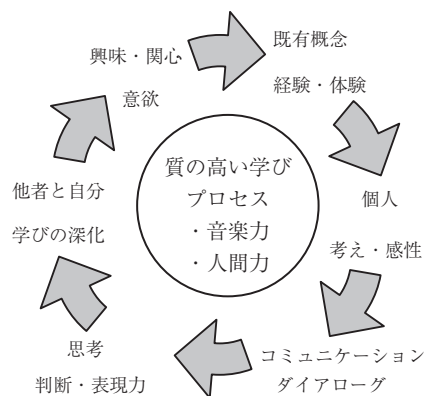


図2 授業デザインの視点 (渡辺 2015)

このデザインの視点は、「質の高い学び」を目

指すプロセスであり、このプロセスに至るまでには、基礎的な学習も行い、学習者の状況や学習の目的に合わせた様々なアプローチが用いられる必要がある。

1 授業実践の内容

授業実践の内容としては、鑑賞領域とし、まずは、サウンドスケープを用いながら耳を鍛え、鑑賞に触れていく。「音を感じる」「音を描く」という学習内容であり、学生は様々な「音」を聴き、聴覚を研ぎ澄ますエクササイズをいくつか経験した後、楽曲を聴取し想像力を働かせ、自分なりのイメージを膨らませていくこととなる。内面に様々な音色を感じて音をイメージしているのであろう学生、集中できず、右から左へ音が流れてしまっているのであろう学生、学習意識はないが潜在的に心が音に反応し、何か自分自身の心の変容を感じているのであろう学生など、さまざまである。大切なことは、外的な姿だけでなく内的な部分で学習に向き合っているかである。ここで、聴取した楽曲にそれぞれが題名をつける。一人一人の題名を互いに発表していくと、違う題名が出てきた。学生たちは、驚きを感じながら発想や創造性が自由であることに面白さも感じ始めた。聴取における個々の違いを感じ、どうしてそのような違いが生まれるのか、興味を持ち始めた。そして、お互いの感じ方をダイアログしていくことで、音楽への探求心が芽生え始めた。結論や答えは二の次である。活動はさらにその音楽についての物語を書いていく活動に発展し、その情景をも描いていく。既存概念や経験値・経験の差から活動が進むにつれて、表現方法は多様化していく。しかし、個人差はあるが、学習を始めた頃よりも一人一人の学習への向き合い方は変化し、次々と筆が進みだした。

音楽を聴取して作業している時は、ただひたすら真剣に集中して描いているが、個人の思いや感性が表現として記録に残ることで、ふと自分自身を客観的に捉えるようになる。自分との向き合いの時間である。そこから、ダイアログへと発展する。必ずグループごとに役割を回し、何かしらの学びに責任をもって取り組ませる。自分自身の

存在の認識と、ダイアログから得る他者の認識である。なぜそう思ったのか、なぜそう感じたのか、初めはぎこちないダイアログも回数を重ねていくと、音楽的な内容に発展していく。音楽の要素について積極的に触れられていない学生においても、無意識に楽曲の中身には触れているのである。楽曲の中身にある音楽要素を互いに捉えているが、それぞれの表現方法に違いがあることが面白い。他者とダイアログしていく、自己の考えや感じたことを、ダイアログを用いて他者と関わっていくことから、学習の根底にあるねらいに触れていくことになるのである。また、その活動過程では、すぐに文章で描ける者、デザインや絵で描ける者、また全体像を考え整理して表現できる者、一つひとつ整理せず、捉えたものをとにかく記録する者、全く筆を動かさない者、自分の内面とのダイアログを十分に行ってから、皆が書き終わった後に表現していく者、さまざまである。この一人一人の思考の仕方や物事に対する判断の段階、表現におけるまでの経緯など、個々によって違う学びを行っていることも興味深い。時間がかかったとしても、最終的には、一人一人が着々と学習に向き合っているのである。そこにはダイアログを通して更に自分自身について何か気づきをもたらすような学びはないか模索していく姿があった。主体的に次の学びへ向かっていくことが、学習そのものに対する興味・意欲・関心の再ステップであり、今の自分自身の学習から次の発展に繋がるものと考ええる。

ダイアログを通した授業デザインを重ねていくうちに、発表の場面では、自分でまとめた事柄などについて積極的に説明したり、相手の立場や考えをお互いに尊重し合ったりするような場面が見られるようになってきた。書く場面では、板書をそのままノートに写すだけでなく、学習者同士が集めた情報を互いに記録し、整理・分析してまとめることができた。

2 授業実践の考察

授業のリフレクションとして、学生にアンケートを実施した。活動から何を学ぶことができたか、学生のコメントを以下にまとめた。音楽科授業デ

ザインを援用し実践していることから、そのデザインにおけるプロセスの観点から考察を行った。

【個人 考え・感性】

- ・複数の音が常に身近にあるが聴く耳が弱ってきている。聴く耳を養うことができた。
- ・大学で今まで聴こえていただろう蝉の音が、4年目になって初めて教室から聴こえてきた。

【コミュニケーション】

- ・コミュニケーションをとることができ、他者と協働し自分の感じ方や考え方が深まることもある。また表現や感性が豊かになっていくと感じられた。
- ・人とのやりとりを通して、音楽への興味関心が高まる。音楽を通して、空間を共にする、このなんと表現したらよいか分からない感覚が生まれた。
- ・友と共に高め合い、コミュニケーション能力を向上させる。誰かと何かをやり遂げる達成感や支え合うことの大切さ、共同することの良さに気づく。
- ・音楽を通して、その人の印象が変わったりするので、意外な一面が見られた感じがした。音楽を通して他者と繋がることのできる楽しさ。
- ・仲間の存在の大きさに気づくことができた。
- ・グループでの活動は、一人で感じたり考えたりできないことが、たくさんでてくるので大切な活動だと思った。

【他者と自分】

- ・音楽に対する自分の考えをしっかりと持ったり、深く考えたりすることによって音楽に対してだけでなく、あらゆる事柄に思いを巡らすことができるようになる。
- ・自分とは違う感じ方を知り、その意味を考えることも他者を理解するための練習になる。純粋に友達と音楽を楽しむことができた。
- ・体験したり、他者と関わったりしなければ創造していく力は生まれないと感じた。
- ・どう伝えれば皆に分かるのだろうと少し困ることもあった。しかし、そのような時は、グループの全員で協力できることが分かった。またそれぞれの新たな一面が見られることが

できた。

- ・全員が認め合い、他人との感じ方の相違点を楽しいと感じることが大切。
- ・同じ音を聴いていても、人によって表現が全然違うのだなと感じ取ることができた。

【興味・関心・意欲】

- ・座学と活動が適度に取り入れられることによって自分から勉強しようと思えた。
- ・アクティブな活動と深い学びがあった。
- ・講義と実践があることで楽しく学習できる。
- ・活動のフィードバックができるから整理できる。

今回の研究では、音楽実践のあらゆる場面で身体と音楽を通したダイアログを存在させた。また、この実践における共同体として、一人一人が存在していることの価値や、この時間に存在している空間を大事にし、一人一人が解釈を交流し合う「場」や仲間と共有する時間を生み出していく役割を生み出してきた。

ダイアログを用いることによって、自分の考えを他者に分かるように説明することが必要となり、個々の活動が責任ある学習となる。また自分で学びとった認識を相対化し、他者と比較検討することができるため、今まで行われてきた知識伝達型授業にはない、ダイアログを中心とした授業形態の学びが実践できた。また、異なる考え方を持つ他者との協働構成による空間の中で、新たな「学び・知」を創出させることができた。「他者との関わり」を行うには、自分自身の思考過程を振り返り、自身の考えを持たねばならない。自身の既有概念に立ち返りながら、学習を振り返ることで、メタ認知的思考を育むことにも繋がる。メタ認知的思考を用いて話し合い、学び合うことで、思考段階にも広がりを見せた。さらに、「学ぶ・実践・振り返る」体験をその都度意識したことにより、共同体全体の水準が向上していくことが見られた。また、客観的な根拠を基に他者と交流し、自分なりの考えを持ったり音楽に対する価値意識を広げたりしていく過程に学習としての意味がある。

今回の実践では、一人一人が「音楽的な見方・考え方」を働かせながら、音楽表現をしたり音楽

を聴いたりし、互いに気付いたことや感じたことを言葉や音楽で活発に伝え合い、それぞれを共有し共感する活動に至った。しかし、授業デザインにおける、学びの深化においては発展が乏しい。また、コミュニケーションをとることの楽しさやそこから得た関心・意欲・興味の発展には繋がっているものの、一人一人の学習における専門性や思考・判断・表現力等、音楽的な手法を使ったダイアログにまでは達していないことが明らかになった。「自分と音楽」とを「向き合わせる」こと、仲間と触れ合いながら自分と同じ考えや違う考えの刺激を受けた後に、もう一度自分自身を見つめなおしていくこと、学習に深化をもたらせていくことが課題である。また、自分の考えを整理し、まとめ、最終的には、音楽を通して自分自身を知り、社会に繋がる学習を目指していくことが期待される。指導者としては、ダイアログやコミュニケーションを通して、さらに「共有する・振り返り・気づく力」に着目し、リーダーシップ性や発問のスキル向上を目指すこと。そして、授業デザインの再考やファシリテーターなどの担い手になり、深く教材を理解することや、ワークシートの質の向上等々が課題となる。一人一人の可能性を引き出し、グループやチームの力を醸成させ、集団での学びを促進することができるようにしていかなければならない。今後これらの点を吟味し、大学生の発達段階に応じた有用な学習指導の構築をさらに進めていきたい。

おわりに

ダイアログを用いることから、他者を受け入れる姿勢を持ち、他者の考えや意見を取り入れ、コミュニケーションしていく中で、新たな考えや自分自身の深化が見られた。「関わり」の中から学んだものを、自分自身の学びに取り入れることによって、更なる楽曲理解と表現活動に生かされる。これは、鑑賞領域や表現領域の歌唱、器楽、創作などといった他の領域分野においても同じ構造が考えられる。しかし、ダイアログによって教育することだけが重要なのではなく、そこには常に音楽があり、音楽実践を通して身体と音楽を

通したダイアログを進めていくことが望ましいと考える。

自分とは異なる文化や歴史、また多様な価値観をもつ人々と共に、正解がひとつでない課題や経験したことのない課題を解決していかなければならない。多文化共生時代の中で、積極的な開かれた「個」として自己を確立し、他者を受容し、様々な価値観を持つ人々と共に思考し、協力・協働しながら課題を解決し、新たな価値を生み出しながら社会に貢献できる個人が求められている。今、学生たちは、限られた集団の中でのみ関わる傾向にある。インターネットを通じたコミュニケーションが普及しており、身体感覚が乏しくなっていることが他者との関わりにも影響していると考えられる。言語活動の充実により、コミュニケーションに関する能力、感性や創造性を育んだり、情緒を養ったりすることが求められる。したがって、多様な価値観や体験を持つ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、様々な問題についてダイアログをもとに情報を共有し合い、自ら深く考え、相互に考えを伝え合い、深め合いながら合意形成・課題解決をしていこうとする姿勢が重要であると考ええる。

本研究では、「授業デザイン」における「ダイアログ」に着目し、一人一人が「音楽」に向き合い、音楽と共に自己表現をしていく過程を考察、再構成し、学生に対して実践を試みた。そこから、自分の考えを持ち、互いの解釈を交流する「場」や仲間と共感し合いながら、仲間と音楽を模索し、創造し、表現し合い、聴きあうことで自己を啓発していくことの可能性を見出すことができた。また、音楽理解の幅を広げ、価値判断を培っていくこと、自己解釈の根拠を説明していく力（言語表現）を養うことを目指して実践を行ったが、これらの視点については、課題を残すことになった。また、今以上に充実した協働的な学びを生むために、アクティブラーニングなどの方法についてもより実践を深め、検証していく必要がある。

多角的な視点や意識を持って音楽を見つめることで、自分の存在を認識し、音楽を通して自分を模索し、自分にとっての「音楽」とは何かを考え

ていくことに繋げていくことのできる実践の構築が望まれる。本実践での「ダイアログ」がその視点を効率的に高め、より充実した「音楽」に対する認識を深めていくことのできるプロセスとなることを念頭に置きながら、今後も研究を深めていきたい。

引用文献

- Bohm, David (2004). On dialogue. Routledge, (デヴィッド・ボーム 金井真弓(訳) (2007). ダイアログ：対立から共生へ 議論から対話へ, 英治出版, p18, pp23-25.)
- 中央教育審議会 (2016). 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申).
- 松下佳代 (2015). ディープ・アクティブラーニング, 勁草書房, pp17-18, pp32-33, pp62-65.
- 渡辺行野 (2015). ダイアログを用いた音楽科授業デザインに関する研究, 研究紀要／東京学芸大学教育学部附属竹早中学校 53, pp.41-46.

参考文献

- 北川達夫・平田オリザ (2013). ニッポンには対話がない, 三省堂.
- 仲原淳 (2013). ダイアログ対話する組織, ダイアモンド社.
- 佐藤公治 (2012). 音を創る 音を聴く, 新曜社.
- 渡辺行野 (2014). 音楽科教育における対話とコミュニティ形成に関する研究, 研究紀要／東京学芸大学教育学部附属竹早中学校 52, pp.37-42.

(2016.9.28 受稿, 2016.11.9 受理)